

# 重度・重複障害の生徒のキャリア発達を促す授業づくり

## 特別支援学校高等部での接客活動からの一考察

甲斐 なつ<sup>\*1</sup>・柳澤亜希子

Practice to promote career development of the children with profound multiple disabilities at the special needs school

KAI Natsu<sup>\*1</sup>, YANAGISAWA Akiko

(Received May 31, 2022)

キーワード：特別支援学校、重度・重複障害、キャリア発達、役割意識、他者との関わり

### はじめに

特別支援学校学習指導要領解説総則等編（高等部）（文部科学省，2017）には、「生徒が学校で学ぶことと社会との接続を意識させ、一人一人の社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を育み、キャリア発達を促すキャリア教育の充実を図ること」と明示されている。キャリア発達とは、「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」（中央教育審議会，2011）と定義されている。つまり、様々な経験や社会との接点を通して、自己実現と自己の確立に向けて必要な資質・能力を育成することが求められている。

重度・重複障害の生徒については、この障害の複雑さや特性により安心・安全な学校生活を保障し、健康の維持・増進に比重を置いている。このため、指導場面では主たる担当教員との個別対応の時間が多く、他の教員や生徒同士の関わりが少なくなりがちな傾向にある。キャリア発達の視点からこうした状況を省みると、重度・重複障害の生徒にも学級や学年を超えた集団や同世代の仲間、日常的に関わる教員以外等の多様な他者との関わりをもつ機会を意図的に設定することが重要であると考えられる。

重度・重複障害の生徒の集団での学習では、生徒の多様な実態を踏まえて興味・関心を広げ、コミュニケーション能力を高めることを目標に活動を行ってきた。しかし、あらためて高等部卒業を目前にした彼らにとっての必要な学びとは何か、必要な学びを実現する授業とはいかなるものかと考えると、社会的自立や社会参加を見据えた授業には課題があり、実践も限られていることから更なる実践例の蓄積が求められる。

本稿では、特別支援学校高等部の重度・重複障害の生徒を対象に、校内のカフェスペースを活用した接客活動を通して、重度・重複障害の子どもたちのキャリア発達を促すための授業の在り方とその可能性について考察した。

## 1. 方法

### 1-1 対象

A 特別支援学校高等部普通科（以下、A 校）の重度・重複障害学級に在籍する生徒 6 名（1 年生 2 名、2 年生 1 名、3 年生 3 名）を対象とした。表 1 に対象生徒の実態を示した。いずれの生徒も肢体不自由な知的障害を併せ有していた。対象生徒は、日常生活動作において教員等からの支援を要することが多かった。このため、自分から他者に働きかけることが少なく、学習活動場面においては受け身の姿が見られることが多かった。

A 校では週 4 日（各日とも 2 時間続きで設定）、学年や在籍学級を超えて編成したグループ「総合班」で、

\*1 山口県立下関特別支援学校（令和 3 年度 山口大学教育学部「特別支援教育長期研修教員派遣」教員）

創作活動やレクリエーション、作業等を行う生活単元学習の時間を設けている。上述した対象生徒6名は、「総合班」に所属していた。重度・重複障害学級の生徒には、自立活動を主とした教育課程を編成している。このため、所属学級での指導では個別対応が主であるが、「総合班」での活動は生徒同士の関わりを重視した活動の時間として位置づけていた。

表1 総合班に属する対象生徒の実態

生徒	学年	実態
B	3	車椅子で自走。明瞭な発語はないが簡単な会話は理解し、返事や身振りで意思表示できる。好奇心旺盛。
C	3	車椅子で自走。明瞭な発語はないが簡単な会話は理解し、返事や身振りで意思表示できる。初めての環境や活動が苦手。
D	3	電動車椅子の使用を開始。言葉でのやり取りが可能。気分には波がある。
E	2	車椅子を有しているが大半は自力歩行。ただし、見守りが必要。自身が好む活動を自由に行うことを好み、初めての環境や予め設定された活動を行うことが苦手。明瞭な発語はないが、表情や手の動きで自分の気持ちを伝えることができる。
F	1	片麻痺があるものの自力歩行で過ごす。ただし、見守りが必要。簡単な会話は理解し、特定の言葉や身振りで意思表示できる。動きのある活動を好む。
G	1	電動車椅子の使用を開始。言葉でのやり取りが可能。何事にもまじめに取り組む。指先を使った細かな動きに困難さがある。

## 1-2 単元について

対象生徒6名は自ら他者に働きかけることが少なく、他者との相互的なやり取りの機会が限られている。このため、他者との関わりの中で生徒が自分の役割を果たす活動として「カフェ活動」を計画した。

### 1-2-1 カフェ活動を取り上げた理由

カフェ活動を取り上げたのは、5つの理由からであった。1つは、対象生徒のこれまでの経験を活かすためであった。A校には就業実践科が設置されており、校内に常設されているカフェスペースで定期的に校内や地域住民向けにカフェを開業している。総合班の生徒らも、これまでコーヒー豆を挽く役割を担ったり、客としてカフェを利用したりする等の経験をしており、カフェで過ごす時間を楽しみにしていた。このため、カフェ活動を取り上げることで対象生徒の経験や興味を活かすことができると判断した。2つ目は、地域交流の場になっている校内のカフェスペースを利用することで、対象生徒の接客への意識を高めることができると考えた。3つ目は、仕事を分担できる接客を取り上げることで相互的な関わりを生み出すことができると考えた。対象生徒の実態から、注文をとる、物の受け渡し、客への声掛け等の接客に関わる一連の仕事を個人が全て遂行することには難しさがある。しかし、仕事を分担し、それらをつなげることで仲間を意識して取り組めるのではないかと考えた。4つ目は、対象生徒の生活年齢に合った活動を取り上げるためである。重度・重複障害の生徒について、名古屋（2013）は「発達段階に目を奪われるあまりに、(中略) 高等部卒業まで幼子のごとき扱いを受けて」と指摘している。障害の程度や発達段階を考慮しつつ、高等部段階の生徒としてふさわしい活動を設定するために同年代の就業実践科の生徒と一緒に活動する機会を設けることにした。5つ目は、学校卒業後の生活とのつながりを見据えてである。総合班の生徒の卒業後の主な進路は、福祉施設である。カフェでの接客を行っている施設があるため、卒業後の生活との関連を考慮した。

### 1-2-2 生活単元学習「カフェを楽しもう カフェでおもてなしをしよう」の目標

本単元の各目標（①知識・技能、②思考力・判断力・表現力、③学びに向かう力・人間性等）は、表2の通りであった。

### 1-2-3 本単元の構成

本単元(全14時間)はX年6月～10月に実施し、5つのステップで構成した。ステップ1(計4時間)では、総合班の活動後にお茶を飲む時間を設定し、好きなものを自己選択したり意思表示したりする場面を意図的に設定することで、対象生徒がその時間を楽しんでいると感ずることができるようにした。ステップ2(計4時間)では、校内のカフェスペースを利用した「総合班カフェ」の開設を目指してカフェでの仕事を交代で経験して得意な役割を選択する、接客に必要なフレーズの練習を行った。ステップ3(1時間)では、「総合班カフェ」として総合班以外の教員を招き、対象生徒が分担した役割に沿って飲料をふるまう活動を行った。ステップ4(計4時間)では、学校祭の校内カフェでの喫茶サービスへの参加を目指して就業実践科の生徒と合同練習を行い、ステップ5(1時間)では、就業実践科の生徒と協力して学校祭で保護者や地域住民に対して喫茶サービスを行った。このように、対象生徒が「好きな飲料を選択して自分自身が楽しむ」、「自分が楽しいことを他者と共有する」、接客を通じて「他者に喜んでもらう」といった流れで活動を展開することで対象生徒が自身の役割を意識し、他者と関わる意欲が高まるように意図して計画した。

表2 生活単元学習「カフェを楽しもう カフェでおもてなしをしよう」の目標

【知識・技能】
・お茶会のやり方や、カフェでの役割を知る。
【思考力・判断力・表現力】
・飲み物の種類や仕事の内容を自分なりの方法で選択できる。
・卒業後の生活に向けてイメージを膨らませることができる。
【学びに向かう力・人間性等】
・人に喜んでもらう体験を通して、自分の役割や自分の価値に気づく。
・カフェでの役割に見通しを持ち、主体的に取り組むことができる。
・クラス以外の友達や教員との関わりを楽しむことができる。

## 2. 各ステップでの活動内容と対象生徒の目標及び活動時の様子

### 2-1 ステップ1での活動

#### 2-1-1 「お茶の時間を楽しもう」(計4時間)

本単元の導入では、総合班に属する対象生徒がお茶会を楽しむ活動を行った。初回は、メニュー表から好きな飲料を自分で選んで飲む、ウォーターサーバーを使って自分で飲料を注ぐ体験を行った。初回の活動のみ中庭においてドリンクバー形式で実施した。これは対象生徒が飲料をこぼしても気にしなくて良いこと、開放感のある雰囲気の中で活動することで生徒に新たな活動に期待感を持って欲しいと考えたからであった。2回目以降は、総合班での作業的な活動後にお茶会の時間を設けた。初回と同様に、飲みたい飲料の選択と自分で飲料を注ぐ体験を行った。表3に、ステップ1での対象生徒の個別の目標と手立てを示した。

表3 ステップ1での対象生徒の個別の目標と手立て

	個別の目標	個別の手立て
B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・メニュー表から指差しで好きな飲み物を選ぶ。</li> <li>・ウォーターサーバーのレバーの上げ下げを自分で行ってジュースを注ぐ。</li> <li>・作業時間を含め、お茶会の時間まで活動に参加できる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ウォーターサーバーを操作し適量で止める際に、「もう少し」「ストップ」等タイミングを見て教員が声を掛ける。</li> <li>・作業中に「頑張ったら今日もお茶が飲めるね」等の声掛けを行い、最後にお茶会があることを確認する。</li> </ul>
C	<ul style="list-style-type: none"> <li>・メニュー表を指さしたり、提示されたジュースのペットボトルを握ったりすることで、自分の飲みたい飲み物を伝える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・落ち着いて選ぶことができるよう、友達が選び終わった後に選ぶようにする。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分からウォーターサーバーのレバーに触れ、教員と一緒に注ぐ。</li> <li>友達と一緒に飲み物を飲むことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>飲み物を選んだと思われる行動が見られたら、教員が声を掛け、表情やうなずき、発声などを確認する。</li> <li>周囲の視線が気になりにくい場所を選んで飲むようにする。</li> <li>教室から使い慣れたコップを持参する。</li> </ul>
D	<ul style="list-style-type: none"> <li>言葉で好きな飲み物を伝えることができる。</li> <li>ウォーターサーバーを操作して、適量を注ぐ。</li> <li>気持ちが安定している時は、活動に参加する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>気持ちが安定するように、楽しい雰囲気づくりや、声掛けを行う。</li> <li>本人の意向をその都度聞きながら無理のないように活動を進める。</li> </ul>
E	<ul style="list-style-type: none"> <li>メニュー表を指さしたり、提示されたジュースのペットボトルを握ったりすることで、自分の飲みたい飲み物を伝える。</li> <li>ウォーターサーバーのレバーに自分から手を伸ばし、教員と一緒に注ぐことができる。</li> <li>友達と一緒に飲み物を飲むことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>集中して取り組めるように周囲が落ち着いてから飲み物を選んだり注いだりする。</li> <li>飲み物を飲む際は、友達の近くに行って、楽しい雰囲気の中で飲むようにする。</li> </ul>
F	<ul style="list-style-type: none"> <li>メニュー表から指差しで自分の好きな飲み物を選ぶ。</li> <li>ウォーターサーバーを使って、自分で飲み物を注ぐことができる。</li> <li>作業時間を含め、お茶会の時間まで活動に参加できる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>活動の終わりにお茶会があることを声掛けしながら、活動への意欲を高める。</li> <li>ウォーターサーバーを使う際は、注ぎ終わりに「ストップ」の声掛け、または教員が手を添えて一緒に行う。</li> </ul>
G	<ul style="list-style-type: none"> <li>言葉で自分の好きな飲み物を伝えることができる。</li> <li>ウォーターサーバーを使って、自分で適量を注ぐことができる。</li> <li>友達と一緒に飲み物を飲むことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ウォーターサーバーを使う際は、教員が手順を声掛けしながら、できるだけ自分の力で行うようにする。</li> </ul>

対象生徒の実態に応じて彼らの主体性を尊重しつつ、教師が必要に応じて言葉がけを行った。また、対象生徒が、飲みたい飲料を自己選択し自身で注ぐことができるように教材・教具の工夫を行った。飲料は、校内のカフェのメニューにあるものから選択した。音声言語での意思伝達が難しい生徒には、指差しで意思表示できるように写真のメニュー表を用意し、また、メニュー表での選択が難しい生徒にはペットボトルの実物を示した。対象生徒の中には、ペットボトルを握る、手首をひねって注ぐ、適量を見て注ぐのを止める等の一連の動きを自力で行うことが難しい者がいた。このため、レバーを下げると飲料が出て、レバーを戻すと止まる仕組みになっているウォーターサーバーを用意した。

## 2-1-2 ステップ1での対象生徒の様子

初回は、教師が授業の準備をしている時間から対象生徒が様子を見にきたり、ウォーターサーバーの所に集まってきたりし、対象生徒らが本活動に興味を抱いていることがうかがえた。授業中にトイレに行くことが多い生徒BとFは、作業後にお茶会の時間を設けてからは時間いっぱい活動に参加するようになった。

自分の飲みたい飲料を選択する活動では、生徒B、D、F、Gは言葉や指差し等の違いはあるものの、毎回明確に自分で選んでいることがわかった。生徒DとGは飲料を選ぶ際に自分は何を選ぶか、教師は何を選ぶかを話題にして会話を楽しんでいた。言語での意思表示が難しい生徒BとFに写真付きのメニュー表を使用したところ、指差しで選択でき、教師が言葉で確認するとうなずきや音声で意思表示した。一方、生徒CとEはメニュー表をあちこち触る、ペットボトルの実物を提示するとどちらにも手が触れる、再度確認すると最初に選択したものと異なる飲料に触る等の様子が見られ、本人の意思を確認しにくかった。

ウォーターサーバーで飲料を注ぐ活動では、生徒DとGは自分でカップをセットして適量を注ぐことができた。最初は教員が手順について言葉がけをしたが、徐々に少ない援助で可能になった。生徒B、E、Fは、一部の動作に教員の補助が必要であったが、レバーを下げて飲料を注ぐ動作を自力で行うことができた。

ウォーターサーバーのレバーに自分から手を伸ばし、飲料が出ると笑顔を見せ、飲料が注がれる様子を真剣な表情で見ていた。一方、初めての活動が苦手な生徒Cは、ウォーターサーバーに自分から手を伸ばすことが少なかった。教員の言葉がけだけでは難しく、手を添えて一緒にレバーを操作することから始めた。回数を重ねるにつれて手を伸ばす様子が見られたものの、レバーに触れるとすぐに手を離していた。

## 2-2 ステップ2での活動

### 2-2-1 「総合班カフェ」の開設を目指そう（計4時間）

ステップ2では、総合班以外の他者にお茶の時間を楽しんでもらうために「総合班カフェ」を開くことを計画し、接客の練習に取り組んだ。対象生徒が接客の仕事内容を知るために、本校の就業実践科の生徒が特別支援学校を対象とした技能競技検定の「喫茶サービス部門」の出場に向けた練習の様子と、総合班の卒業生が福祉施設のカフェで接客する様子を収録した動画を視聴させた。接客のイメージを膨らませた上で、接客の流れを4つのパート（表4）に分け、対象生徒が各パートを体験する時間を設けた。対象生徒と教員が客とスタッフの役割を交代しながら各パートに取り組み、できること、できないこと、工夫したらできそうなことを確認した。各パートを一通り練習して本番ではどのパートを担当するか、対象生徒の希望を踏まえて教員が話し合って決定した。

表4 接客サービスの各パートの仕事内容

パート	仕事内容
1	(1)出迎え「いらっしゃいませ」:テーブルまで案内する。
	(2)注文取り:注文カード、ボードでやり取り、注文を取る。
	(3)カウンターに注文を伝達:注文ボードを手渡す。
2	(4)飲み物準備:注文ボードにある飲み物を、ウォーターサーバーで注ぐ。
3	(5)飲み物の運搬:ワゴンまたは車椅子のテーブルに装着したカップホルダーにカップを乗せ、客のところまで運ぶ。
	(6)飲み物をテーブルに置く
4	(7)見送り
	(8)片付け:空のカップをワゴン、または車椅子のテーブルに装着したカップホルダーに乗せる。テーブルを布巾で拭く。空のカップを返却口（流し）まで運ぶ。

対象生徒にステップ1で実施したお茶会とこれから取り組む活動が異なることを伝えるために、活動の場を校内のカフェスペース（以下、カフェ）に移した。カフェには複数の接客用テーブルがあり、車椅子での移動を考慮して、余裕を持って移動できる間取りに変更した。ステップ2を開始した時期に電動車椅子の使用を開始した生徒がいた。操作の練習を始めたばかりであったため、直線で行き来できる動線にした。また、車椅子を使用せず自力歩行で飲料を運ぶ生徒にはワゴンを用意した。ワゴンや車椅子のテーブルにカップホルダーを設置し、安定して運ぶことができるようにした。

対象生徒は、言葉でのやり取りや伝票にメモすることが困難であったため、飲料カード（写真1）と注文用ボード（写真2）を用いて注文を取るようにした。



写真1 飲料カード

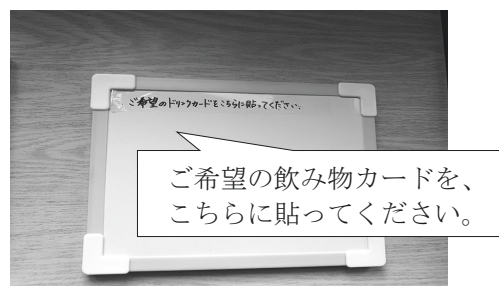


写真2 注文用ボード

飲料カードは、メニュー表の代わりとしてあらかじめテーブルに置いておいた。注文を取る係の生徒は、「ご希望の飲み物カードをこちらに貼ってください」と書かれた注文用ボードを客に手渡し、客はテーブル上の飲料カードから注文したい物を選んで注文用ボードに貼り、係の生徒に手渡すようにした。これにより言葉でのやり取りが困難な生徒も身振りや手振りで、注文用ボードの受け渡しで注文を取ることが可能になった。表5に、ステップ2での対象生徒の個別の目標と手立てを示した。

表5 ステップ2での対象生徒の個別の目標と手立て

生徒	個別の目標	個別の手立て
B	<ul style="list-style-type: none"> <li>音声や身振り手振りで、おもてなしの表現ができる。</li> <li>車椅子の自走による移動や、物の受け渡しができる。</li> <li>自分に合った役割を、教員と一緒に見つける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>教員がモデルを示して、身振りや手振りの練習を行う。</li> <li>次に仕事を引き継ぐ生徒の名前を伝えながら移動先を示す。</li> </ul>
C	<ul style="list-style-type: none"> <li>音声や身振り手振りで、おもてなしの表現ができる。</li> <li>車椅子の自走による移動や、物の受け渡しができる。</li> <li>自分に合った役割を、教員と一緒に見つける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>手にする物を手掛かりに、何の役割を行うのか伝える。</li> <li>教員が目的の場所に立ち、移動先へ誘導する。</li> </ul>
D	<ul style="list-style-type: none"> <li>言葉でおもてなしの表現ができる。</li> <li>電動車椅子を操作して、目的の場所に移動することができる。</li> <li>やりたい役割を自分で伝えることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>接客の手順を示した見本カードを見ながら、接客の言葉を確認する。</li> </ul>
E	<ul style="list-style-type: none"> <li>身振りや手振りでおもてなしの表現ができる。</li> <li>自分で歩いて目的の場所へ移動することができる。</li> <li>自分に合った役割を、教員と一緒に見つける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>教員がモデルを示し、一緒に身振り手振りを練習する。</li> <li>運搬はワゴンを使用し、押しながら移動する。</li> </ul>
F	<ul style="list-style-type: none"> <li>身振り手振りでおもてなしの表現ができる。</li> <li>自分で歩いて目的の場所へ移動することができる。</li> <li>自分に合った役割を、教員と一緒に見つける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>教員がモデルを示し、一緒に身振り手振りを練習する。</li> <li>運搬はワゴンを使用し、押しながら移動する。</li> </ul>
G	<ul style="list-style-type: none"> <li>言葉でおもてなしの表現ができる。</li> <li>直線的な移動は自分で電動車椅子を操作して行き、目的の場所に移動することができる。</li> <li>やりたい役割を自分で伝えることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「いらっしゃいませ」等のフレーズを、教員と一緒に言う。</li> <li>不慣れな電動車椅子での方向転換は、教員が操作する。</li> </ul>

### 2-2-2 ステップ2での対象生徒の様子

総合班の卒業生の福祉施設のカフェでの接客の様子を動画で視聴した際、生徒B、D、F、Gは画面に注目して卒業生の名前を口にして笑っていた。接客の練習では初めての活動に戸惑う様子はあったが、教員と一緒に見様見真似で取り組む姿が見られた。しかし、生徒Cは動画視聴時や接客練習でよそ見が多く、集中できていなかった。

接客練習では、例えば「いらっしゃいませ」の言葉の代わりに手を大きく使って身振りで案内する、注文を取る際は教員の「好きな飲み物カードをこちらに貼ってください」の言葉に合わせて、注文用ボードを差し出す等、個々の生徒ができる方法を検討した。例えば、言葉でやり取りができる生徒Dは、接客手順や接客で使用するフレーズを示したカードを手掛かりにして落ち着いて取り組んでいるように見えたが、接客パートの練習後、慣れない接客用語を上手く言えずに落ち込んでいた。このため、本番の接客では担任が傍につき、担任と生徒Dで受け持つ役割を決めた。生徒B、C、Fについては、活動中の表情や様子から教員が提案した役割を行ってもらった上で本人の意向を確認した。この回を欠席した生徒Eについては、担任と相談し、自立活動の指導で目的地まで歩くことに取り組んでいることを踏まえて、その指導と関連付けて片付けのパートを自力歩行で行うことにした。担当パートの決定後、「総合班カフェ」の本番に向けて接客の練習を通して行い、担当パートについて生徒が自力で行うこと、教師と一緒に行うこと、主として教師が行う

ことを整理した。対象生徒が各教員に招待状を手渡し、教員から「楽しみにしているよ」「必ず行くよ」等の言葉をかけてもらおうと嬉しそうな表情を見せていた。

## 2-3 ステップ3での活動

### 2-3-1 「総合班カフェ（本番）」（1時間）

総合班カフェでは、校内の教員（一組2名）を相手に接客を行った。対象生徒は仕事を分担し交代で接客を行い、自分の仕事がない時間は、カフェ内の待機場所で他の生徒の接客の様子を見て待機した。本時は、接客の本番であることを意識できるようにするために、対象生徒らはお揃いのポロシャツとエプロンを着用し、教員もエプロンや三角巾を着用して本番の雰囲気を出すようにした。

表6に、対象生徒の各担当パートと個別の目標及び手立てを示した。本時では、対象生徒が自分の役割を遂行できたかを評価するために、具体的な接客の動きを目標に据えた。

表6 ステップ3での対象生徒の個別の目標と手立て

生徒	個別の目標	個別の手立て
B	<b>【担当パート：出迎え・オーダー取り】</b> ・身振りや音声で出迎えを行う。 ・客に笑顔で対応する。 ・注文用ボードを手を持って客に示す。 ・車椅子の自走で移動し、注文用ボードを次の係に顔を見て渡す。	・教師は必要に応じて身振り手振りを一緒に行う。 ・口頭での指示は必要最小限にする。
C	<b>【担当パート：片付け】</b> ・車椅子の自走でテーブルまで移動する。 ・返却場所まで車椅子の自走で戻ってくる。 ・自分の役割がない時間も進行を見ながら落ち着いて過ごす。	・役割が回ってくるまでの待ち時間に、接客の進捗状況等を声掛けし、緊張を和らげる。 ・教員が目的の場所に立ち、移動を誘導する。
D	<b>【担当パート：飲み物を注ぐ、飲み物を運ぶ】</b> ・氷の入ったカップを自分でウォーターサーバーにセットし、適量の飲料を注ぐ。 ・電動車椅子を自分で操作してテーブルまで移動する。 ・客とのやり取りを笑顔で行う。	・接客の場での言葉のやり取りは教員が行う。（飲み物をテーブルに置くことや「コーヒーのお客様」「ご注文はお揃いでしょうか」等の言葉は教員が行う。）
E	<b>【担当パート：片付け】</b> ・かごを持つまたはワゴンを押す等してテーブルまで歩いて行く。 ・かごを持って下膳の場所まで歩いて戻ってくる。 ・最後までおもてなしの場に参加する。	・日ごろ学級で使っているかごに近いものを使用する。 ・待ち時間を落ち着いて過ごし、動き出しが円滑にいくように、教室の使い慣れた椅子、机を用意する。
F	<b>【担当パート：出迎え・オーダー取り】</b> ・身振りと言葉で出迎える。 ・客に笑顔で対応する。 ・注文用ボードを受け取り、飲料を入れる場所まで自分で移動する。 ・注文用ボードを次の係に顔を見て渡す。	・教師は必要に応じて身振り手振りを一緒に行う。
G	<b>【担当パート：飲み物を注ぐ、飲み物を運ぶ】</b> ・氷の入ったカップを自分でウォーターサーバーにセットし、適量の飲み物を注ぐ。 ・電動車椅子を自分で操作して移動し、客に言葉で確認を取りながら該当の飲料を手渡す。 ・仕事の引継ぎや、接客の際に、笑顔で言葉でのやり取りを行う。	・「いらっしゃませ」等の挨拶を教師も一緒に言う。 ・電動車椅子の操作について、方向転換の操作は教員が行う。 ・手順について、必要な場合は声掛けを行う。

## 2-3-2 ステップ3での対象生徒の様子

生徒B、C、D、F、Gは、自分が接客する時間外は仲間が接客する様子や客の言動に注目する、仲間が役割を果たすと自分のことのように笑顔になる、自分の役割を終えて仲間の仕事を引き継ぐ際に相手をよく見ている等、個別の目標を達成できていた。しかし、生徒Eは、教室に戻ろうとし、教師が引き留めると廊下に座り込んでしまった。教師が車椅子に乗り換えることを提案するとそれに応じた。車椅子に一度座ると途中で車椅子を降りて接客をすることに拒否的な態度を示し、個別の目標を達成することができなかった。

## 2-4 ステップ4での活動

### 2-4-1 「学校祭でのカフェサービスへの参加を目指そう」（計4時間）

A校で開催される学校祭のカフェサービスのスタッフとして参加することを目標に、接客の練習を行った。接客スタッフとして参加するに当たり、就業実践科の担当教員と対象生徒の参加方法について協議した。学校祭は来場者が多いため速やかに接客を行う必要があること、就業実践科の生徒は「職業」の授業で接客オペレーションを習得しているため、大きな変更は彼らに負担を生じさせる等の課題が挙げられた。このため、カフェのメインスペースは平常通り就業実践科の生徒が接客を担い、対象生徒はメインスペースに続く別のスペースに設置された3つのテーブルで就業実践科の2名の生徒とペアを組んで接客を行うことにした。表7に、ステップ4での対象生徒の個別目標と手立てを示した。

### 2-4-2 ステップ4での対象生徒の様子

就業実践科は教室が離れており、対象生徒らとの日常的な関わりが少ない。このため、活動開始時に就業実践科の生徒が対象生徒らに積極的に話しかける様子はなく、また、対象生徒においても同様の様子が見られた。しかし、合同練習が始まると就業実践科の生徒が対象生徒を目的のテーブルまで先導する、動き出しに時間のかかる総合班の生徒をテーブル前で待つ等の様子が見られた。

ステップ4では、ステップ2～3で練習した運搬に加えて客の流れを見ながらの接客に挑戦した。また、学校祭のカフェで出すコーヒーの豆を挽く練習も行った。これは以前に経験したことのある作業であったため、対象生徒に大きな混乱は生じなかった。

表7 ステップ4での対象生徒の個別の目標と手立て

生徒	個別の目標	個別の手立て
B	<ul style="list-style-type: none"> <li>音声や身振り手振りで、おもてなしの表現ができる。</li> <li>車椅子の自走による運搬ができる。</li> <li>コーヒー豆をすくったり、ボタンスイッチを押したりして、コーヒー豆を挽くことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>教員がモデルを示し、身振りや手振りの練習を行う。</li> <li>一緒に接客を行う就業実践科の生徒の名前を伝えながら移動先を促す。</li> </ul>
C	<ul style="list-style-type: none"> <li>音声や身振り手振りで、おもてなしの表現ができる。</li> <li>車椅子の自走による運搬ができる。</li> <li>ボタンスイッチを操作して、コーヒー豆を挽くことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>教員がモデルを示し、身振りや手振りの練習を行う。</li> <li>一緒に接客を行う就業実践科の生徒の名前を伝えながら移動先を促す。</li> </ul>
D	<ul style="list-style-type: none"> <li>状況を見て、「いらしゃいませ」「ありがとうございました」を自分から言う。</li> <li>電動車椅子を操作して、目的の場所に移動することができる。</li> <li>コーヒー豆を計量したり、タイマーやボタンスイッチを自分で操作したりしてコーヒー豆を挽くことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>教員がモデルになるように客に挨拶する。</li> <li>テーブル番号やテーブルクロスの色を教員が言葉掛けをする。</li> </ul>
E	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分で歩いて目的の場所へ移動することができる。</li> <li>時間一杯練習に参加することができる。</li> <li>ボタンスイッチを押して、コーヒー豆を挽くことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>運搬はワゴンを使用し、押しながら移動する。</li> <li>移動先のテーブルを教員が示しながら移動を促す。</li> </ul>
F	<ul style="list-style-type: none"> <li>身振り手振りでおもてなしの表現ができる。</li> <li>自分で歩いて目的の場所へ移動することができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>教員がモデルを示し、一緒に身振り手振りを練習する。</li> </ul>



	<ul style="list-style-type: none"> <li>豆をすくったり、ボタンスイッチを押したりしてコーヒー豆を挽くことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>運搬は、ワゴンを使用し、押しながら移動する。</li> </ul>
G	<ul style="list-style-type: none"> <li>教員と一緒に「いらしゃいませ」「ありがとうございました」を自分から言う。</li> <li>電動車椅子を操作して、目的の場所に移動することができる。</li> <li>コーヒー豆を計量したり、ボタンスイッチを操作したりしてコーヒー豆を挽くことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>教員がモデルになるように客に挨拶する。</li> <li>電動車椅子の操作は、直線部分に絞り、方向転換は教員が行う。</li> </ul>

新しい環境や活動に不安を抱きやすい生徒CとDは、回を重ねるにつれ笑顔を見せるようになった。一方、生徒Eはステップ3の時の同様、歩いて運搬する仕事を拒んだ。カフェでの接客が生徒Eにとって苦しい活動になることを避けるために自力歩行で運搬することを目標とはせず、経験のあるコーヒー豆を挽く仕事を専属で行うことに変更した。コーヒー豆を挽くための電動ミルには、ボタンスイッチを接続して操作を簡便にした。本体の電源スイッチはダイヤル式になっているが、ダイヤルをつまんでひねる動きが難しい生徒の実態を考慮してボタンスイッチを使用した（写真3）。



写真3 コーヒー豆を挽く電動ミル

## 2-5 ステップ5での活動

### 2-5-1 「学校祭でのカフェサービス（本番）」（1時間）

就業実践科の生徒と協力して、対象生徒は接客とコーヒーの計量・豆挽きを行った。接客の時間を前半と後半に分けて交代で担当し、3つのテーブルの接客を同時進行で行った。就業実践科の生徒とペアになり、飲料の運搬や片付けを行った。対象生徒が接客するテーブルには、それぞれ違う色のテーブルクロスを使用し、テーブル番号が分からない生徒が、クロスの色で場所を判別できるようにした。教員が客を入れるタイミングを就業実践科の生徒に伝えることで、対象生徒の仕事のペースを調整した。表8に、ステップ5での対象生徒の個別の目標と手立てを示した。

表8 ステップ5での対象生徒の個別の目標と手立て

生徒	個別の目標	個別の手立て
B	<b>【担当パート：飲み物の運搬・片付け】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>車椅子の自走で飲み物をテーブルまで運ぶ。</li> <li>車椅子の自走でカップを返却場所まで運ぶ。</li> <li>笑顔で客に対応する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>教員がモデルを示しながら、身振りや手振りの練習を行う。</li> <li>一緒に接客を行う就業実践科の生徒の名前を伝えながら移動先を促す。</li> </ul>
C	<b>【担当パート：飲み物の運搬・片付け】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>車椅子の自走で飲み物をテーブルまで運ぶ。</li> <li>車椅子の自走でカップを返却場所まで運ぶ。</li> <li>自分の役割がない時間も、進行を見ながら落ち着いて過ごす。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>待ち時間は、教師が周囲の様子等について語りかけ、一緒に状況を確認する。</li> </ul>

D	<p>【担当パート：飲み物の運搬・片付け・コーヒー豆の計量】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・電動椅子を自分で操作して移動し、飲み物を運ぶ。</li> <li>・電動椅子を自分で操作して移動し、カップを返却場所まで運ぶ。</li> <li>・接客が少ない時は、デジタル秤でコーヒー豆を 30 グラム計る工程を一人で行う。</li> <li>・客にあいさつや会話、笑顔で対応する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・テーブル番号やテーブルクロスの色を教員が声掛けする。</li> <li>・待ち時間は、教師が周囲の様子について語りかけ、一緒に状況を確認する。</li> </ul>
E	<p>【担当パート：コーヒー豆挽き】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・コーヒー豆を挽く作業において、教員の指示を受けて電動スイッチを押したり止めたりする。</li> <li>・自分のペースで豆挽き作業を続ける。</li> <li>・最後までおもてなしの場に参加する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・豆を挽く場所は、接客の場から少し離れ落ち着いて取り組める場所に設定する。</li> <li>・休憩を取り、作業場から一定時間離れてリラックスできるようにする。</li> </ul>
F	<p>【担当パート：出迎え・飲み物の運搬・片付け】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・身振りと言葉で出迎える。</li> <li>・ワゴンを自分で押して、飲み物を運ぶ。</li> <li>・ワゴンを自分で押してカップを返却場所まで運ぶ。</li> <li>・客に笑顔で対応する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・待ち時間が多く手持ち無沙汰にならないよう、運搬の仕事がない時は、教師が判断し、入口での出迎えを行うように指示をする。</li> </ul>
G	<p>【担当パート：飲み物の運搬・片付け】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・電動椅子を自分で操作して移動し、飲み物を運ぶ。</li> <li>・電動椅子を自分で操作して移動し、カップを返却場所まで運ぶ。</li> <li>・客にあいさつや会話、笑顔で対応する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・テーブル番号やテーブルクロスの色を教員が声掛けする。</li> <li>・教師も一緒に挨拶の言葉を言う。</li> </ul>

## 2-5-2 ステップ5での対象生徒の様子

学校祭で開店したカフェでの接客に参加した対象生徒全員（ただし生徒Bは体調不良で欠席）は、個別の目標を達成することができた。生徒C、D、F、Gは、就業実践科の生徒と練習通り落ち着いて接客を行うことができた。保護者や地域住民等の様々な他者を相手に接客するのは初めてであり、また、次々に来店する客を前にして緊張した様子を見せる対象生徒もいたが、最後まで各々の仕事を遂行することができた。

来客者が入れ替わる中、運搬を担当した生徒C、D、F、Gには、その都度教員が今何をして欲しいかを伝えた。「総合班カフェ」の時と比べると忙しさが増したが、生徒C、D、F、Gは周囲の状況をよく見ており、教員の指示に対応できていた。自分の役割をこなせると、徐々に表情が柔らかくなった。客から感謝の言葉をかけてもらおうと、どの対象生徒も笑顔を見せていた。ステップ3と4でなかなか目標が達成できなかった生徒Eについては、ステップ4の途中で目標を見直して役割を変更しステップ5に臨んだところ、個別の目標を達成することができた。生徒Eは、来場した母親から声をかけられると嬉しそうな表情を見せていた。

## おわりに

重度・重複障害のある生徒のキャリア発達を促す教育活動の一環として取り組んだカフェでの接客活動は、A校においては初めての試みであった。接客の中で自らの役割を果たし、総合班の仲間や他の学科の生徒、地域住民等の様々な人々との関わりを通して、対象生徒はこれまでにない達成感や満足感を得ることができたと感じられた。こうした成果を得ることができたのは、以下のことが影響したと推察する。

1つ目は、他者をもてなすことで喜んでもらうという最終ゴールを見据えて活動内容を段階的に組み、単元化したことである。他者に喜んでもらうためには、対象生徒自身がお茶会の雰囲気や他者との相互的なやりとりを楽しみと感じられることが前提として必要であった。本実践では、まずは対象生徒らがお茶会の時間に期待感を膨らませることから始め、楽しい時間を他者と共有し、接客場面で他者に喜んでもらうという流れで実施した。自己から他者へと向かう形で活動を展開したことが活動のつながりを保ち、そのことで対

象生徒が、前時の活動をベースにして見通しをもって次のステップに進むことができたと考えられる。

2つ目は、本単元を考案するにあたっては、対象生徒の興味・関心やこれまでの経験を踏まえて、それらを活かす形で活動内容を計画したことである。このことは、対象生徒が見通しをもって活動に臨むことを支え、その結果、安心して活動に取り組むことにつながったと推測する。本実践で目標が達成しにくかった生徒Eの場合、経験したことのある活動を活かして役割を切り替え、当人の力を発揮できる場面を設けたことで活動に参加することができた。障害のある子どもにおいては、従来、彼らの経験や身に付けていることを把握し活かすことが強調されているが、本実践を通してその重要性を再確認した。

3つ目は、活動の新奇性である。本実践では対象生徒の経験を活かしつつ、これまで実施したことがない接客の活動を取り上げた。また、他の学科の生徒と合同で活動を行う機会をつくったことも新たな取組であった。本単元初回の活動の準備場面で、対象生徒においてはこれから何が始まるのか興味を示す姿が確認された。重度・重複障害であるため難しいであろう、安心して取り組めるようにと慎重になることで、彼らの興味や活動の幅を狭めてしまっていることがあるのかもしれない。カフェでの接客という新たな試みを通して、対象生徒はこれまでの学習では見せたことのない姿を見せてくれた。子どもの新たな一面を引き出すために、重度の障害があっても新奇的、発展的な活動を取り上げることの大切さを実感した。

4つ目は、個々の目標の明確化とそれに基づく個別の手立て、そして、教材・教具の工夫である。各ステップでは、共通目標に基づいて個々の目標を具体的に設定した。子どもに何を目指して指導するのが明白であったことで、目標達成のために必要な教師の働きかけや教材・教具及び環境設定の工夫を個々に応じた形で検討できたと言える。また、個々の目標が明確に位置づけられていたからこそ、授業場面での対象生徒の様子を捉えて柔軟に目標の見直しを図ることができた。重度・重複障害のある子どもの授業では個別対応が主となることが多いが、個別の目標と手立てが明確に位置づけられていれば集団であっても個に応じた指導は可能であり、それによって取り上げる活動や授業の幅が広がっていくのではないかと期待する。

重度・重複障害のある子どもに対しては、時に指導や支援の間違いが彼らの命に直結する責任の重さから、教師が不安やためらいを感じる事が少なくないが、本実践から重度・重複障害のある子どもの新たな一面や可能性に気づくことができた。重度・重複障害という枠を超えて個々の子どものキャリア発達を促していく授業の在り方を追究していきたい。

## 引用・参考文献

文部科学省 (2011) : 高等学校キャリア教育の手引き, 16-17.

文部科学省 (2017) : 特別支援学校学習指導要領解説総則等編 (高等部), 197-200.

名古屋恒彦 (2013) : 知的障害教育発、キャリア教育. 東洋館出版社, p. 30.

## 付記

本実践は、令和3年度山口大学教育学部「特別支援教育長期研修派遣」の一環として実施した活動の一部を加筆・修正したものです。

## 謝辞

本実践にご協力いただいたA特別支援学校の先生方と対象生徒の皆様にご心より感謝申し上げます。